

フランス哲学についての感想

西田幾多郎

青空文庫

私はフランス哲学にはドイツ哲学やイギリス哲学と異なつた獨得な物の見方考え方があると思う。しかし私は今それについて詳しく考え、詳しく書く暇を有たない。^もただこれまで人に話したり、或は機に触れて書いたりしたことを、思い出るままに記すだけである。

「デカルトといえば、合理主義的哲学の元祖である。しかし彼の『省察録』*Méditationes*などを読んでも、すぐ氣附く」とは、その考え方の直感的ないとある。単に概念的論理的でない。直感的に訴えるものがあるのである。パスカルの語を借りていえば、単に〔l'esprit de gé'ométrie〕〔幾何学の精神〕ではなくて、l'esprit de finesse〔纖細の精神〕といふものがあると思う。フランス哲学の特色は後者にある。同じデカルトの流を汲んだ人も、マールブランシュとスピノザとを比べて見れば、思^{おもいなれば}半に過ぐるものがあるのである。

元来芸術的と考えられるフランス人は感覚的なものによつて思索する人が多い。感覚的なものの内に深い思想を見るのである。フランス語の「サンス」*sens* ふじか語は他の国語に訳し難い意味を有つてゐる。それは「センス」*sense* でもなく、「梵」

Sinnでもない。マールブランシュは「今までなく、デカルトにすらそれがある」と思われる。しかし私はフランス哲学独特な内感的哲学の基礎はパスカルによつて置かれたかに思う。その「心によつての知」*connaissance par cœur* は「サン・アンチーム」*sens intime* 「内奥感、内密感、内親感」としてメーン・ドゥ・ビランの哲学を構成し、遂にベルグソンの純粹持続にまで到つたと考える」とがでかる。メーン・ドゥ・ビランはパスカルが賞讃するところの「*ceux qui cherchent en ge'missant*」[「うぬかなから探求する者」といつような哲学者であつた。

「センス」でもない「ジン」でもない「サンス」は、一面において内面的と考えられると共に、一面に社会的、常識的とも考えることができる。概念に制約せられない直感である。それは自己自身を表現する実在、歴史的実在に対する「サンス」である。そういう意味においては、かかる立場から世界を見るのはモンテーンが先駆をなしたといふことができるであろう。彼は實に非哲学的な哲学者である。日常的題目を日常的に論じた彼の『エツセー』の中には、時に大げさな体系的哲学以上の真理を含んでいる。歴史的実在の世界は日常的世界である（そこ）が哲学のアルファでもオメガでもある）。彼の描いた自己は日常

的世界において生きぬいた自己である。しかしそこからはすぐパスカルの『パンセー』の世界にも行ける。彼は偉大な凡人である。モンテーンがフランス人にこういう物の見方考え方を教えたともいえるであろう。そこからラ・ブリュイエルやヴォーヴナルグなどのいわゆるモラリストへ行くこともできるが、途はメーン・ドゥ・ビランやベルグソンの哲学へも通ずるのである。

京都へ来た初頃には、私は大にベルグソンに共鳴していた。私が始めてベルグソンを知つたのは、まだ四高にいた頃であった。その頃はベルグソンという名は、まだ世の中に知られていない頃であつて、私もその如何なる人かを知らなかつた。ただその頃私は純粹経験という考を中心として考えていたので、[Sur les données immédiates de la conscience.] 「『意識に直接与えられているものについての試論』（岩波文庫版書名は『時間と自由』）」という書名に誘われたのである。しかし最初にベルグソンの精神を掴んだのは、独訳の[Einfuhrung in die Metaphysik] 「『形而上学入門』」であつた。またどういう機会からであつたか、今は思い出せないが、私は早くからメーン・ドゥ・ビランに非常に興味を有つていた。しかし彼自身の著書を手に入れる、とは、困難であつた。京都大学へ来てから、

学校へ、ナヴィルの出版した「*Oeuvres inédites de Maine de Biran*」〔『メーヌ・ド・ビラン未刊行著作集』〕を購入すべくムダにあたるやうに、晩年の *Fondements de la psychologie* 「『心理学の基礎』」や *Anthropologie* 「『人間学新論』の略称」などを読むことができた。今でも私は時に *J'agis, je veux, donc je suis* 「我行為す、我意志す、故に我あり」などいう語を引用することがある。しかしクーザンの出版したものは、遂に手に入れることができなかつた。従つて受動的習慣と能動的習慣との区別を論じた有名な最初の論文などは、近頃テイスセランの出版の全集が出るまでは読むことができなかつた。能動的習慣と受動的習慣との区別の如きは面白い洞察と思う。コンティヤックの感覺論から出でて、その立場を守りながらかえつて主意主義的な理想主義的な立場に行つたのである。私はこういう所に、サン・アンチームの哲学獨得の、ドイツやイギリスの哲学と異なつたものがあると思うのである。習慣という如き」とは、普通は、哲学的に重要な役目を有つとは考えられないのであるが、ラヴェッソンなどの哲学においては、習慣というものが世界観の根本的な役目をしている。ラヴェッソンはシェリングの影響を受けたというが、シェリングの同一が、メーン・ドゥ・ビランの影響によつて、ラヴェッソンにおいて習慣となつたと考えられるのは面白い。如何に同様な考え方がドイツとフランスとによつて異なるかが分る。ロツク

の経験論の影響を受けたコンディイヤックの流からメーン・ドゥ・ビランなどが出たのも同様である。無論、コンディイヤックの感覚というのが、既にロツクなどの感覚というものと同一のものでなかつたかも知れない。

フランス哲学で合理主義といつても、単に概念的でない。デカルトが *clare et distincte* 「明晰判明」という所に、既に視覚的なものがある。優れたフランスの思想家の書いたものには、ショパンハウエルが深くて明徹なスイスの湖水に ^{たど}喩えたようなものが感ぜられる。私はアンリ・ポアンカレのものなどにそういうものを感ずるのである。

我国では明治の初年は如何にあつたか知らないが、大体二十年頃以前は英國哲学の影響を受け、二十年頃以後はドイツ哲学の影響を受けて、今日に至つたといい得るであろう。私はドイツ哲学の優秀を疑うものではないが、右にいつたように、フランス哲学にはフランス哲学に獨得なものがあり、それはドイツ哲学やイギリス哲学にはないものであると思う。概念的体系に捕われて案外に内容の貧弱なものよりも、かえつて直観的な物の見方考え方において優れた所があるかと思う。私は考えるに、ギリシャ哲学には深い思索的な概

念的な所と、美しい芸術的な、直感的な所があつた。前者はドイツ人がこれを伝え、後者はフランス人がこれを伝えたといい得るではなかろうか。

青空文庫情報

底本：「日本の名隨筆 別巻92 哲学」作品社

1998（平成10）年10月25日発行

底本の親本：「西田幾多郎隨筆集」岩波書店

入力：加藤恭子

校正：nns

2000年8月29日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

フランス哲学についての感想

西田幾多郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>